ブレイクダンス踊るダウン症児たち

インストラクターは理工大学院生 甚内良太さん

世界の選手が集うメーンステージで、みんながのびのびと笑顔でストリートダンスを披露している。2・26長野スペシャル五輪開幕を伝える信濃毎日新聞の一枚の写真だ。ダウン症の子供たちだった。3月開幕の愛知万博のプレ・イベントにも招かれて、子供たちは森山良子さんのバックダンスをつとめた。その傍らには、いつも「良太先生」――。インストラクターの甚内良太さん。じつは中央大学の大学院生（マスター1年）である。それも精密工学の研究者という異色ぶり。ビックリ、でしょう？

学生記者　池内真由（法学部1年）十滝沢孝祐（総合政策学部2年）

後楽園キャンパスの木陰のベンチへ、甚内さんは急ぎ足でやってきた。「いやあ、待たせちゃって」と片手を上げながら。一見、普通の院生と変わらない。さわやかで賢そうな人。ダンスのこと、子供たちのことについて語りだすと、口調とまなざしが一段となごんで、研究者とは別の顔になった。そう、NHK子供番組の「体操のお兄さん」を思わせるような。中肉中背、ちょっと細身。「ええ、168センチ、53キロ。もっと筋肉をつけようと、と努力しているんですけどね」と笑った。

…きっかけはぁ～ストリートダンス！

「LOVE JUNX」という団体に、甚内さんは所属している。5人いるインストラクターの一人。活動して1年半ほどになる。ダウン症児らにダンスパフォーマンスの楽しさ、ダンスを通じて表現することの素晴らしさを教えている、NPO法人「TOYBOX」の活動団体だ。

ダウン症は染色体の異常で起こる病気で、発病の割合は、1000人に1人と高い。病を抱えてひたむきに生きる子供とともに家族の成長をつづった手記も多く、『たったひとつのたからもの』はテレビドラマ化もされて反響をよんだ。子供役で出演した杉森翼君はダウン症児で、LOVE JUNXの生徒の一人。同団体には、日本ダウン症協会に登録している子供たちを中心に、よちよち歩きの子供から30歳くらいまで、約270人が参加している。

甚内さんが友人に憧れてダンスを始めたのは大学2年の頃だ。荻窪で踊る、ちょっと有名なストリートダンスの輪に加わって、「ブレイクダンス」に磨きをかけた。そこでLOVE JUNXの代表をつとめる牧野アンナさんを知る友人と出会った。運命の出会いである。ダウン症の子供たちの、ダンスの練習風景を見にいった。

「ダウン症児と聞いて、初めは暗いイメージを持っていたんですよ。でも、こんなに楽しく生きているんだぁって衝撃を受けたんです。子供たちは、できないことに取り組もうとして、がんばっている。すばらしい影響を受けました」

そして、間近に触れるようになった子供たちの姿。

「ダウン症児は普通の子供たちと変わらないんです。仮病を使って気を引こうとしたり、一緒にケンカをしたり……。なかには、しっかりした子、自分で生活できるくらいに働いている子もいるんです。『喫茶店を作りたい』と自分の夢を持ってい

る子もいますよ」

インストラクターはプロである。レッスンを時給に換算すると、１０００―１５００円だが、大きな公演では、ボーナスが出るそうだ。聞きながら、ヴィトンのベルトについ目がいってしまったのですが。

「良太センセーイ」

――「良太センセーイ」と子供の声がした。ときには「良太～」と呼ばれたりもするらしい。

１週間後、横浜ラポール（新横浜）のレッスン会場に出かけたのである。他にも代々木オリンピックセンターなどで土・日に練習しているという。

体験・見学は気軽にできる。この日も、何人かが体験レッスンに参加していた。フロア中央で行われる練習を、父兄らは遠巻きに座って見学する。隣には、50歳くらいの男性。「会社の同僚の子供がダウン症だったのをきっかけに、ちょくちょくレッスンを見学するようになったんです。いいですよね、障害を抱えながらもこんなに明るく元気な姿を見ると逆に励まされる気持ちになります」

レッスンは、エンジョイという比較的小さい子供や、初心者向きのクラスと、上級者向けのアドバンスの２つに分けて行われた。他にも、プロをめざすコースなどもあるという。

見学したアドバンスのコースにも、見るからにダンスのうまい上級者がいる。小さい子でもインストラクターの真似をして、怖がらずに倒立しようとしている。見ているこちらは、少しヒヤリ。

良太先生が教えるのは、ブレイクダンスやヒップホップだ。小さい子供が無邪気に「これやってぇ」とリクエストするままに、逆立ちをして、足を跳ねるように動かしたり、片手を離したり。それを見ながら「ぱちぱち」と手を叩いて、「きゃっきゃ」と幼い声がはずんだ。踊っていない子に対しては背中にそっと触れて、踊ってごらん、と他のインストラクターも一様に親身の指導が伝わってくる。

「初めは恥ずかしがってなかなか踊ろうとしない子もいますよ。それが徐々に体を動かすようになって、一緒にダンスの輪に。みるみる表情がイキイキとしてくるんです。感動しますね」と良太先生は言った。

笑顔のヒミツ

それに、子供たちの笑顔のこと。「なかのＺＥＲＯ」大ホールでこと し１月に行われたライブのチラシ写真を見ても、笑顔で踊るみんなの表情がとても印象的だ。あの自然さはどこからくるのだろう。初めてＬＯＶＥ ＪＵＮＸを知った人も、不思

議に強い興味を覚えるらしい。普通は、振り付けに気を取られて顔がこわばってしまったり、写真を意識して、動きのない堅い笑顔になってしまう。ダンスをしながら笑うのは意外に難しい、というのに。

――笑うことも教えているのですか？

「いえ、そうじゃないんです。ダンスの全身運動がいいのかもしれませんねぇ。表情がしぜんにリラックスしてくるんですよ」

インストラクターにとっても、新鮮な驚きなのかもしれない。身体から溢れるようなLOVE JUNXの子供たちのダンスは大好評だ。活躍の場は、どんどん広がりをみせている。

長野五輪、愛知万博のイベント出演に次いで、来年の八月中旬にカナダで開催される「世界ダウン症会議」での公演も決定しているそうだ。愛知万博といえば、舞台裏のエピソードも一つ。森山良子はバックダンスを喜んでOKしたが、浜崎×××には断られた……というのだが。

「やはり印象深いのは」と甚内さんは長野スペシャル五輪の光景を振り返る。「ふだん、親がいると甘えてしまう子供たちが、成長していくのがよく分かって、感動しました」

大変なこともちろんある。「ダンスが踊れるだけじゃダメなんですよ。ダンス以外の他のところも子供たちは、本当によく見ています。それによって、インストラクターが話をしたときに子供たちが受け取る言葉の重みも変わってくる。だから子供たちにとって『カリスマ』でなくてはならないんです。初めは怒ることもできなかった。でも、怒ることもとても大切なことなんです」

研究室では「快音設計」

休日はそちらに専念、平日はむろん研究者の日々である。

正式には理工学研究科精密工学専攻博士課程前期1年。いかにもムズカシそうだけど、音響解析の戸井武司教授ゼミで、自動車の吸気の音・振動分析などを企業と共同研究しているという。これまでは自動車、家電、楽器などの「騒音低減」がテーマだったとすれば、これからは「心地よい音にする快音設計」。「静音化から快音化へ」という先端研究だ。「将来は、自動車メーカーに就職して研究を生かしたい」と将来設計も順調なようだ。

踊りたいから踊る

――再び、レッスン会場で。

子供たちは、思い思いに、飛び跳ねるように踊る。振動が座っているこちらまで伝わってくる。良太先生も楽しそうに踊っている。それを見てまた、子供たちも踊りたくなるのだろう。誰かに合わせるのではなく、決まったことを決まった枠内で踊るのでもない。私たちが他人の目を気にして、いつの間にか時と場所によって自分を巧みに使い分けるようなスイッチを、彼らはまるで持っていないかのように見える。「踊りたいから、踊っている」――そんな躍動感に満ちていた。

ダンスのプロにして研究者。きつくないですか？ と聞いたら、「インストラクターが少ないせいもあって、疲れますよ。いまは1日休みがほしい」と本音も漏らして続けた。

「でもいま、2つのうち、どちらかを選べといわれても、どちらも手離せないですね。これが一番バランスのとれた状態なんです」

「体操のお兄さん」の笑顔だった。